

**多摩キャンパスは
初秋を迎えております。**

暑がつた今年の夏も終わり、多摩キャンパスでは後期授業が落ち着いた雰囲気で進んでおります。

本学部では、中期事業計画の実行に向けて、すでに次の3つのWGを設置し活動を進めております。

1. グローバル
2. 学生支援・学生主体運営組織支援
3. ブランディング・広報

最終答申に至った内容については順次実行に移し、学部の更なる発展につなげていきます。

さて、毎年六月初旬に開催している白門経友会定期総会は今年で二十六回目となり、次のようなプログラムで実施し審議事項は滞りなく了承されたことを報告させていただきます。

日時 平成二十八年六月十一日(土)
午後二時 開会

講演会後は、会場を生協四階の「和

白門経友会

場所 中央大学多摩キャンパス
七号館 七一〇四教室

プログラム
(一) 定期総会 午後二時～二時三十分

- ① 平成二十七年度事業報告・決算報告
- ② 平成二十八年度事業計画・予算案
- ③ その他

(二) 記念講演会

「沖縄経済と国際航空貨物ハブ」

講師 塩見 英治 教授

総会では、冒頭で濱岡幹事長の挨拶に続き、佐藤副幹事長より昨年度の事業報告・決算報告ならびに今年度の事業計画・事業予算について説明があり異議なく承認されました。

講演会では、塩見英治教授によりまずご自分の研究内容に関連し、今回のテーマを選んだ動機・背景についてお話しがあり、引き続き動画を含めた豊富な資料をもとに沖縄との関連で国際航空貨物ハブについて詳細にわかりやすく解説していただきました。

おん」に移し懇親会を開催しました。今回も経友会の特長である若手を含めたOBと現役学生との交流を深め、懇親の場として会員相互の交流を活発に行なうことができ風間副会長の締めの挨拶で終了いたしました。
今後は総会以外でも学生を含めた交流の場を増やす所存ですので会員各位におかれましては、幹事会等へのご参加とともに一層のご協力をお願い申し上げます。



アジアの経済回廊とグリーン経済

名誉教授 緒方 俊雄

第一回

(本稿は一〇一四年六月の
記念講演からの抜粋です。)



私は一九四五年に神奈川県鎌倉市に生まれ、一九六三年に鎌倉学園高校を卒業しました。高校時代の大切な思い出は、硬式野球部に所属し、全国高校野球甲子園大会に出場したことです。私は通算8打数3安打で、ベストエイト(準々決勝)まで進みました。そして一年間浪人をして一九六四年に本学経済学部で入学しました。当時は、校舎はお茶ノ水の駿河台にあり、学園紛争の時代でした。

縁があつて、私は中央大学体育教師の桑原寛樹氏宅に下宿し、「ぐるみ」ラグビークラブを組織し、主将を務めました。学部の専門演習は岩波一寛教授で財政学のゼミでした。一九六八年に卒論に「戦後日本のインフレーション」を書き、その後大学院経済学研究科経済学専攻に進

学部・大学院時代の当初の研究は、ケムブリッジ学派経済学の研究でした。その後、一九七八年に新しいボストン・ケインズ派経済学の動向に興味を持ち、英国のケムブリッジ大学に留学し、J. Robinson, N. Kaldor, P. Sraffa, L. Pasinettiなどの研究者から直接指導を受け、また一九八〇年には米国のニュージャージー州立Rutgers大学において、A.S. Eichner, P. Davidson, H. Minsky, B. Mooreなどの米国の研究者のセミナーに参加し、若手ボストン・ケインズ派経済学研究者たちとの活発な議論を通して、米国の著名な経済雑誌Journal of Post Keynesian Economics の編集委員に選ばれました。中央大学では、川口教授の指導の下で「ボストン・ケインズ派経済学研究会」を組織し、日本経済評論社から同翻訳叢書を行なう仕事に従事させていただきました。

一九七〇年代、時代は大きな転換点に向かつておりました。米国

学、川口弘教授からケインズ経済学の指導を受けました。一九七一年に修士論文「マーシャルの問題・寡占形成の理論」を執筆後、さらに博士課程に進み、同時に本学部の助手になることができました。

学部・大学院時代の最初の研究は、ケムブリッジ学派経済学の研究でした。その後、一九七八年に新しいボストン・ケインズ派経済学の動向に興味を持ち、英國のケムブリッジ大学に留学し、J. Robinson, N. Kaldor, P. Sraffa, L. Pasinettiなどの研究者から直接指導を受け、また一九八〇年には米国のニュージャージー州立Rutgers大学において、A.S. Eichner, P. Davidson, H. Minsky, B. Mooreなどの米国の研究者のセミナーに参加し、若手ボストン・ケインズ派経済学研究者たちとの活発な議論を通して、米国の著名な経済雑誌Journal of Post Keynesian Economics の編集委員に選ばれました。中央大学では、川口教授の指導の下で「ボストン・ケインズ派経済学研究会」を組織し、日本経済評論社から同翻訳叢書を行なう仕事に従事させていただきました。

経済学会では、「経済学の第一の危機」と題した国際会議が開催され、その基調講演を行ったのが、英國ケムブリッジ大学のJ. Robinson教授でした。「第一の危機」は一九三〇年代の経済恐慌と大量失業、この問題に挑戦したのがJ.M. Keynesでした。ケインズの業績は、L. Kleinが『ケインズ革命』として総括しています。しかし、一九七〇年代に石油危機、金融危機を経験する中で、ロビンソン教授は伝統的な経済学では対応できない「第二の危機」に直面していると主張したのです。米国では、この第一の危機論に共鳴する経済学者がニュージャージー州立Rutgers大学に集まり、Journal of Post Keynesian Economics を発刊しました。ちょうどそのような時代に私の米国留学が重なり、多くのボストン・ケインズ派経済学者との交流や知遇を得たわけです。

その後、私の研究に大きな影響を与えたのは、東京大学(当時)の宇沢弘文教授でした。宇沢教授は、当初は最適成長モデルで米国の数理経済学会の先端研究を推進しておりましたが、日本に帰国すると間もなく『自動車の社会的費用』(岩波新書、一九七四年)を発表します。その行

間には、それまでの新古典派経済学の考え方よりは、ケムブリッジ学派や制度学派の考え方が強く描かれていました。私は大変驚き、岩波書店での講演会に参加し、「宇沢経済学」の考え方を教わりました。

宇沢教授が定年退職されるときには、東京大学の研究室を訪問し、中央大学経済学部の新設学科(公共経済学科)への就任要請を行いました。その際に、宇沢教授からは、段ボールに入ったご自身の全著作を二百字に要約する仕事を依頼されました。その時、私は宇沢経済学体系を学習する機会を持つことができました。一九九四年に中央大学に就任していただいてからは、定期的に宇沢研究室でのスペシャルセミナーに参加させていただき、宇沢経済学の根幹をなす「社会的共通資本」、その構成要素である「自然資本」「社会資本」「制度資本」とその応用方法を学びました。

私は、一九九五年に中央大学から一年間、研究専念期間を許可され、再び米国で研究する機会を持ちました。その際に、Rutgers大学の先輩であるLester Brown氏の『地球白書』と、米国生態学者のOdum教授の『生態学の基礎』に注目するこ

とができました。そのとき、はじめて「経済学 (Economics)」と「生態学 (Ecology)」の語源は同じだと知られました。「人口 (Eco)」は地球の住み家というギリシャ語由来の言葉だそうです。

これまでの学問遍歴に基づいて、私の生態経済学、グリーン経済の基本的な考え方を紹介したいと思います。まずケムブリッジ学派の始祖であるA.Marshall から始めましょう。マーシャルは、最初奥さんとの共著『産業経済学 (Economics of Industry)』(一八七九年) を出版しています。この本のタイトルに、従来の「Political Economy」に代えて、初めて単一の言葉で「経済学 (Economics)」を使っています。

しかしそれをすぐに絶版にしてしまった。この本のタイトルに、従来の「Political Economy」に代えて、初めて単一の言葉で「経済学 (Economics)」を使っています。

生物学者は、植物は光合成によって二酸化炭素 (CO_2) を吸収しながら「生産」され、牛のような草食動物は植物を餌にして「消費」します。これは第一次消費と呼びます。次に肉食動物のように、草食動物を餌に消費します。これは第二次消費です。植物の残渣や動物の死骸はミミズや微生物が「分解」し、豊かな土壤を形成します。こうした食物連鎖が生物界の持続可能性を支えています。特に初版は日本の図書館では見かけないので、大学の許可をもらい、全頁をコピーしました。そして各版を原書で比較しながら精読すると、マーシャルの考え方の変遷や力点が理解できます。

そこで驚くことがあります。
彼は生物学者の C. Darwin から大

きな影響を受けているということです。ダーウィンはケムブリッジ大学の生物学者であり、著名な『種の起源』を著しています。マーシャルが注目しているのは、ダーウィンは、経済学者 R. Malthus 『人口論』から大きな示唆を得て、生物学を考案したことです。そして、マーシャルは、今度は経済学者が生物学者から学ぶ時代だということです。この指摘は意外でした。それでは、経済学者は生物学者のどの視点を学んだのかということに興味を持ちました。

マーシャルは「物的な世界」と「道徳的・知的な世界」を区別し、経済学の「生産」を定義します。ここでも通説どおり、人間は、物的な世界では、生産をしていません。森林を作っていますが、木材それ自体を生産していません。森林を伐採して加工しているにすぎません。森林は、太陽光や土壤や降雨の自然の生態系の循環を通じて育成(生産)しているのです。

他方、人間は、道徳的・知的な世界では、知識を生み出します。人間生活が豊かで便利になるように設計図や技術を考案し、家具や家屋を作ることができます。これはすぐ重要な指摘です。なぜなら、人間は「物的な世界」では自然界的森林や石油を「生産」しているわけではなく、自然界のストックを消費しているに過ぎないからです。だからではなく、自然界のストックを消費しているに過ぎないからです。だから石油を大量消費すればやがては枯渇しますし、森林をたくさん伐採すれば、山に木がなくなり、砂漠化します。それでも、森林は植物ですかね、生態系の知識や技術を使って植林し、生態系を適切に管理すれば再生はできます。再生産可能です。

(次号へ続く)



え、あの先生がシリーズ②

経済学部 教授 井村 進哉



経済学部OBの一人でありながら、学外プロジェクトにかまけて、あまり経友会にご協力できず恐縮しております。また会を支えられておられる皆さんに厚く感謝申し上げます。

私は、一九七三年本学部入学、一九七八年駿河台校舎で卒業。多摩移転初年度に本学大学院商学研究科入学。一九八五年中退後、小樽商大に十一年在職。その間、二年間、米国フィラデルフィアの銀行家協会で客員研究員、一九九六年四月、本学部金融論担当者として赴任。二〇〇四年韓国ソウル大学、二〇〇五年カリフオルニア大学サクランメントセンター(UCCS)で客員研究員。瞬く間に二十年が経ちました。

学園紛争が激しかった神奈川県立鶴見高校出身。受験勉強を嫌い、自分の好きな哲学、歴史、語学しか勉

強しなかつただけに、大学でようやく「本当の勉強ができる」との気持ちが強かつたと思います。一九七三年本学入学前後は狂乱物価・石油ショック。学部時代は物価論・インフレ論こそが時代の中心テーマであると思っていました。一年次、二年次のゼミと、真剣勝負で厳しく指導してくださった荒井正夫先生、「ブレーゲリ読みましたか?」と紳士に接してくださった岩波一寛先生はじめ、何人かの大先輩達に接し、「このような仕事ができ世界を透徹できる学問がしたい」と思いました。大学院では呉天降先生のもと、アメリカ金融史を入り口に企業財務、財政金融政策の勉強を始め、小樽商大で住宅金融を中心とした比較金融システム研究にたどり着きました。勉強を始めたのはつい昨日のよう。まさに「少年老い易く学成り難し」です。

前任校は、一学年五百名の単科大学(商学部四学科、商学科百六十名)。まるで高校のようなキャンパスの地方の国立大学で、名前と顔は一致せずとも「どこかで見覚えのある学生」を相手に財務管理論、証券市場論を担当。ゼミ生も九期卒業。中大赴任時の最初のショックは、授業でも試

験でも、学生の間で情報も模範答案も行き渡らない千名規模のマスプロモーション。地方出身者と首都圏出身者とが切磋琢磨する中、良くも悪くも「資格試験受験大学」、「中級公務員養成大学」。図書館利用率も高く眞面目な学生が多い。

学生定員千名は駿河台時代から変わりませんが、学生の三割は通常不登校。平均的生活パターンは、「下宿→アルバイト・雀荘・その他→たまに出る授業」で、試験期には会場の教室にたどり着くことさえ難しい劣悪なキャンパスでした。紛争末期にも試験も半分はロックアウトでレポート試験でしたが、先人達のゼミナール重視のおかげで、望む者には門戸が開かれ、喫茶店ゼミも楽しい思い出となっています。

十八歳人口が減少する中、MARCHの多くが学生定員削減の再編をとげる中、むしろ中大は法学部千三百名体制など拡張戦略を採用しましたが、「数を打つても当たらなくなつた」のが現実。改組論議に連して、学部規模千名には「規模の経済」が働いているという意見も出了ました。

しかし、その前に一部の教員が教育に打ち込み、単位認定基準を厳しくすると学生は「安全パイ」の科目を履修する「イタチごっこ」をどうするのか、学部教員一丸となつた教育責任をどう果たすのか、プランディング戦略を明示し共有できるのか等、検討課題は多く、それらは看過できない段階に入っています。大学受験者総数の縮小の中、制度を放置してきたが故の地盤沈下は深刻です。制度疲労を起こしている従来型の学部システムの抜本的な改革が焦眉の課題であると感じています。

